

## 平成15年度 病虫害発生予察 特殊報 第2号

病虫害名： サビヒョウタンゾウムシ  
*Scepticus griseus* ROELOFS

対 象： ヤブラン，ジャノヒゲ，ノシラン

### 1．特殊報の内容

サビヒョウタンゾウムシによるヤブラン，ジャノヒゲ(リュウノヒゲ)，ノシランへの被害と拡大を都下で確認した。

### 2．発生経過

- (1) あきる野市など西多摩地域のグランドカバープランツ生産者圃場で栽培されているポット仕立てのジャノヒゲなどにおいて，葉を丸くかじり取られる被害が多く見られてきた。
- (2) 防除所・農業試験場・普及センター共同で現地調査などを行い，ヒョウタンゾウムシと思われる成虫を採集するとともに，露地のヤブランでも葉の食害痕や成虫を確認した。
- (3) 数力所から採集した成虫標本を森本桂博士(九州大学名誉教授)に送付したところ標記と同定された。
- (4) 本種を含むヒョウタンゾウムシ類は野菜類の害虫として古くから知られてきた。都下では最近，都市緑化の材料(グランドカバープランツ)として利用されるヤブラン属およびリュウノヒゲ属の需要増に伴って，これら生産が拡大するとともに被害が顕在化してきたものと考えられる。

### 3．形態 (第2図;成虫・幼虫)

- (1) 体長：成虫約6.5～8.2mm。頭部が小さく胸部と腹部が大きいのでヒョウタン形に見える。
- (2) 成虫は灰褐色から黒褐色で，灰色や暗色の鱗片を装う。大きさや色は個体差が大きい。
- (3) 幼虫は無脚，乳白～黄白色で頭部は褐色。横皺があり腹側に湾曲する。老熟幼虫は7～10mm。蛹は乳白色で7～8mm。

### 4．生態・分布

- (1) 年1回の発生であるが，成虫の寿命が長く成・幼虫とも越冬するため両ステージが周年重なって見られる。本州，四国，九州に分布。関東以南の内陸部に多い。
- (2) 成虫は耕地とその周辺の山林や草地などの土塊の下や株元などの地中の浅いところで越冬し，幼虫は主として発生圃場の土中で越冬する。越冬幼虫は4～6月頃に活動して蛹化し，7月頃に成虫となる。越冬成虫による春の産卵に由来する新成虫は8月から羽化する。
- (3) 本年1月下旬に施設栽培のジャノヒゲポット苗の株元に潜む成虫を確認した。5月下旬頃には露地のヤブラン葉上で成虫の摂食活動や交尾活動が盛んに観察された。その後，10～11月にも成虫の活動がよく見られた。
- (4) 後翅は退化しており，飛翔することはできない。移動は歩行または人為的によるものである。

### 5．被害

- (1) 成虫が地上部の葉や茎を，幼虫が土中の根部を食害する。寄主植物の範囲は極めて広く，成虫はマメ類や

ニンジン、ネギ、ゴボウ他多くの野菜の葉を食害し、幼虫は土中でゴボウ、ニンジンなど根菜類の表面を食害することが知られている。千葉県では最近、近縁のトビロサビヒョウタンゾウムシと共にニンジン、ネギ、ゴボウ、ラッカセイ、コマツナ、トウモロコシなどの害虫として被害が増加しているとのことである。

(2) ヤブラン、ジャルヒゲ、ノシランの新葉部を周縁部から半円状に食害する。被害の見られた株の根元には成虫が潜んでいることが多い。

(3) 地下部においても幼虫の食害が予想される。今後、調査を予定している。

## 6. 防除対策および注意

(1) 現在のところヤブラン、ジャルヒゲ等でのサビヒョウタンゾウムシに対する登録農薬は無い。

(2) 未発生地や施設においては成虫の侵入を防ぐことが肝要である。発生地では被害株の地下部に幼虫がいることが予想されるので移動にあたっては注意を要する。なお、防除対策などの問い合わせは病害虫防除所に連絡のこと。

## 7. 参考文献

清水喜一(2003) ヒョウタンゾウムシ類の生態と防除の考え方 千葉の植物防疫 104: 5-9.

梅谷献二・岡田利承編(2003) 日本農業害虫大事典 全国農村教育協会 pp.1203.

## 8. 図:第1~4図



第1図 サビヒョウタンゾウムシ成虫 (Scale bar : 5mm)



第2図 タマリユウ苗被害状況, 株元に潜む成虫



第3図 交尾中ペアとヤブラン葉の摂食痕



第4図 ヤブラン被害状況